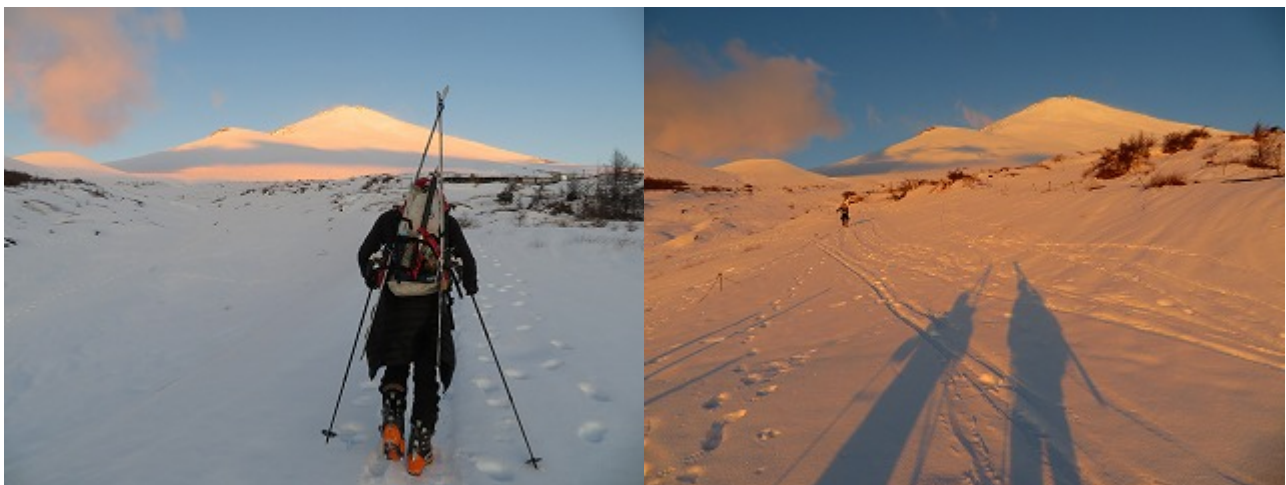


裾野麗峰山の会・山行報告書		文・IK	写真・GT
山行番	NO. 1853		
山域	富士山・御殿場口（山岳スキー）		
コース	竹沢種苗店 5:05—洞門駐車場発 6:09—2000m—上塚上コル—御殿庭方面—上塚上コル—上塚南面—洞門駐車場着 12:10—長泉		
累計標高差	上り	御殿場口太郎坊洞門約 1285m—標高約 2000m＝約 715m 幕岩上約 1750m～上塚コル約 1885m＝約 135m	
	下り	同上	
快適度	（5段階評価）5＝藪ない		
参加者	後藤（72歳 11か月）、山本（52歳、元会員）、井上（50歳 0ヶ月）＝3名		

2019年4月から山に復帰し、とうとうこの日がやってきた。すべてはこの日を想定した準備だった。テン泊の縦走、冬山アルパインそして山スキーが、最も体力を必要とする。

この日のために重い荷物を持てるようにし、息が切れないようにし、長時間歩けるようにと考えてきた。最後の山スキーは2015年3月の白馬八方唐松岳で、この時は強烈な雨溝でスキーが全くできず、体力は完全に切れ、スキーゲレンデのリフトに乗って下山した。その悔しい思いのまま、約5年がたっていた。



モルゲンロート

今回は、元会員の山本さんが参加。山本さんとは2009年4月に富士吉田口で吉田大沢の山スキーをいっしょにやって以来で、これまた11年ぶりの再会だった。すっきり痩せて、パワフルさを感じた。5時に竹沢種苗店でピックアップしてもらい御殿場口太郎坊洞門へ。洞門に近づくにつれ道際の雪が少しずつ増えてくる。気温はマイナス2度の表示だった。

駐車場には、4～5台とまっており、その中に山本さんの富士山ナンバーの黒のベルファイヤがあった。山本さんは現在お住いの藤沢からの参戦で、奥さん同行。奥さんは山本さんを富士山において御殿場の友人に会いに行くのだそう。

まだ真っ暗なので、あわててヘッドランプをだして準備開始。雪は駐車場までであるが、とりあえずス

キーを担いで歩いていく。久しぶりのスキー靴での歩きは慣れない。出した足が雪で滑って戻ってくる。背負ったスキー板が、道の上の木の枝に引っ掛かり何度も立ち止まる。林を抜けるころ、空は次第に明るくなりヘッドランプを消す。

富士山の頂上がお目見えだ。やがて、富士山のショーが始まった。背後の箱根の山頂から太陽がのぞきはじめ、富士山の色が変わり始めた。頂上から下に向かって赤く光り、そして全体が赤くなって、終了。あっという間に色のショーは終わるが、この壮大なショーが見られるのは、このタイミングにここにいるからだ。太陽が出ると、雪面はきらきらと光り始める。見回すと全ての雪が光っている。まぶしいのではなく、雪の表面に氷の粒が太陽の光を反射している。小学生のころ好きだったアイスクリームの「宝石箱」を思い出す。空の青さに驚く。見る方向によって青の色が違う。



今回一番好きだったのは、南の空の二ツ塚の向こう側の何とも言えない青だった。地上ではお目にかからない色で、軽薄な水色ではなく、深すぎる思い紺色とも違うなんともちょうど自分が好きだと思える青だったので、ずっと見ていられた。御殿場口の富士山の登りは単調なので、こんな景色を歩きながらじっくりと眺められる。

山本さんはやはり強く、どんどん先を行き、後藤さんと私はどんどん離されていく。あるところで、後藤さんが右にでて杭が並ぶコースに移動した。3番手の私は、遅れないようについていく。

アイゼンが必要になって取り付ける。アイゼンの爪が凍った雪面に刺さり、歩きやすい。しかも安心。アイゼンをつけるのも久しぶりなので慎重に歩いた。以前ひっかけて腿をけがしたことがある。標高2000mくらいまで登ったが、これより上は雪はさらにガリガリになりスキーは無理だろうということで登りはここまでとした。山本さんは、すでに相当登ってしまっている。

後藤さんと私は、ここからスキーを履いて二ツ塚上塚の上のコルヘトラバースし、南側の雪の状態を見ることにした。かなり苦労してスキーを付けた。なかなかはまらない。かちかちの斜面では、スキー板がなかなか水平にならず靴がビンディングに平行になりにくい。スキーを履くのに息が切れ、何度も休憩した。やっとのことでスキー装着。

ここからのトラバースがきつかった。雪面は雨溝の畝になっていて、トラバースも進まない。2~3m進んでは止まる連続で、太ももが痛くなる。横滑りだけで息が上がる。どんどん後藤さんに離される。エッジが立たず、足に力を入れてエッジを立てないとずるずると滑り落ちてしまう。

数年ぶりのスキーはこんな感じで始まった。もしかしたら今日は気持ちよいスキーは無理かも。上塚



↑ 凍雲を背に上る（バックは愛鷹連峰）

↓ 富士山は素晴らしい



上のコルで一休み。山本さんに電話連絡し、登りをやめて横移動したことを伝えた。しかし、山本さんの姿は点ほどにも見えない。あの点がそうだとか、あの影が動いて見るとか二人で眺めていたが、どうも下ってくる気配がない。点が動いて見えるのは飛蚊症か。

結局、山本さんだと思っていたのはゴミが上下しているのがそう見えただけだという結論になり、移動を再開した。上塚の南側にまわり、御殿庭方面へトラバースする。ここでもおいてかれる。

樹林帯入口の幕岩の上の沢まで来たが、どうもスキーができる感じではない。スキーを外し、しょってまた戻ることになった。ここで、後藤さんのスキー板の片方が、下に向かって走り出した。

どんどん加速し、幕岩上の沢を生き物が駆け降りていくように滑り落ちていった。スキーのストッパが機能せず下がらなかったようだ。滑り落ちていくのを眺めるしかなく、何百メートルも沢の中をノンストップで滑って行ってしまった。後藤さんは探索に出かけた。私は、ひとりランチタイムとなった。やがて後藤さんがスキーをかついで戻ってきた。今日は飲むかどうかわからなかったが持ってきたビールを開け、後藤さんにおすそわけ。持ってきて正解だった。



やっぱり滑りは楽しい

スキー板をザックに取り付け歩きだす。これまた重い。上塚上コルに戻り、やっとスキー再開。ここで山本さんから電話連絡があり、下塚の下まで来ているとのこと。足にまめができたらしい。

ここからの雪は割合滑ることができた。雨溝の畝はあるが、ターンができる。気持ちいい。スキーの滑り方は体が覚えていた。上塚を西から北に回り、上塚の東から南面にまわることにした。また、横滑りのトラバースだ。もうこりごり。南面まできてそこから、上塚と下塚のコルを通過し下塚北側に滑り降りる。ここでは、富士山は単独峰ではないと感じた。下塚、上塚、宝永山、富士山頂上と、4つの同じ大きさに見えるピークが並んでいる。ここに立った人しかみられない光景だ。雲がいい。凍雲というらしい。(とううん：今にも雪が降り出しそうな雲。 寒々とした冬の曇天・俳句の季語)



よい雪を求めてあちこち滑ってみる。雲が出てきた。後藤さんは、暗くなると雪面の状態がよくわからないので、板を外して歩いて下ることにした。私はひとりスキーで下る。



ここから、四つのピークが見える

誰かのトレースをみてこっちだろうとあたりをつける。スピードをかなり殺してすべるとバランスが悪くなり転びやすくなる。すいすい滑っているときは一回もこけなかったのに、斜度が緩くなってから3回も立ちごけをした。

疲れているせいか、起き上がるのが大変。林の入口で、スキーを外す。私の板は古いもので長く、林の中ではスキーの取り回しができなくなる（私の技術では）。ここで12:00だった。林の中を歩き、12:10に駐車場にでた。

山本さんが片づけをしているところだった。山本さんも少し前についたとのこと。続いて後藤さん到着。6時間履いたスキー靴を外し、足が解放された。いつものようにかかとの内側は直径3センチくらい皮がむけている。いつものことで驚かない。しばらく痛いだろう。風呂にもつけられない。それでもスキーは快感である。

その他の記述（ごとう）

1. 昨年の富士山・初スキーは、3月17日、一昨年は、2月3日、9日。今年は、2月1日だから、今年が特に遅いわけでもなかった。やっぱり、富士山は、こんなものだろう。
2. スキーを流したのは初めて。流れ止めは邪魔でしなかった。ただ、ストパーが下がらなかったのは問題。遭難の可能性もある。ゲレンデでも時々あるが、非常に危険である。
3. 途中はマアママアだったが、下部は最悪。捲土重来。